

江戸川乱歩賞贈呈式所感

塩井祥子

式次第はどこも大体関係者の挨拶に始まり、記念品の贈呈、受賞者のコメントというのが基本である。であるから、ある程度予備知識をつけていかなければよくわからないのでは、という心配があった。

準備とばかりに受賞二作品を読み終えて臨んだが、心配は杞憂に終わった。

第六十七回江戸川乱歩賞贈呈式、初の一般公開は、乱歩賞に詳しくない、受賞作もよく知らないという人にもアプローチしようという試みが満載であった。オープニングに京極夏彦氏のナレーションによる乱歩賞の紹介があり、なんとなくこの賞の小説業界における立ち位置を掴む。驚かされたのは、受賞二作品のPR動画である。伏見美紀氏の『北緯43度のコールドケース』では、作中の文章を積みかける様にPVに組み込んで複雑に絡み合う事件の様相を表現していた。まさに文章のビジュアル化である。次に桃野雅派氏の『老虎残夢』では、作品内の特殊な密室状況が提示され、キャラ立ちしている登場人物たちがイラストになり、まるで活劇の様相であった。興味を引くには最

初の一瞬が大事などの言説がある昨今、小説は不利である。しかし、その不利をもととせず一分程の動画でまずは魅力を伝えようとしている姿勢は野心的だ。「かないますならば一人でも多くの方に受賞作を手にとらせていただいております。お願いいたします。(中略) 小説は読者に届いて完成します」

京極夏彦氏の冒頭の言葉が印象に残る。(早稲田大学大学院生)

江戸川乱歩賞&日本推理作家協会賞贈呈式・トークイベント

王 羽 萌

二〇二一年一月一日、第六十七回江戸川乱歩賞・第七十四回日本推理作家協会賞贈呈式が豊島区立芸術文化劇場にて開催された。初めての一般公開ということもあり、受賞作家の他にも、日本推理作家協会代表理事の京極夏彦氏や、乱歩賞の選考委員の貫井徳郎氏らが登壇するミステリー愛好者にとって「千載一遇」の好機となった。京極氏の愛読者である筆者もあらゆる期待を膨らませながら当日を迎えた。

贈呈式が温かい見守りの中で無事に終わった後、佐藤究氏と丸山ゴンザレス氏による「江戸川乱歩邸」のVTRが流された。両氏は乱歩邸内を巡り、

肌で感じた家の雰囲気や満場の観客に伝えていた。さらに、乱歩の令孫平井憲太郎氏が乱歩と乱歩邸の思い出等をユーモア混じりに語り、観客たちはすっかり心をとらわれた様子であった。

トークイベントには京極氏、貫井氏、綾辻行人氏、辻村深月氏が登場し、乱歩賞の性格や選考の様子、期待する作品像などについて語られた。京極氏は選考会を作家が集まる空間として、先輩が後輩の世話を焼くという乱歩から続く慣習を受け継いでいる場でもあると語った。折衝を重ねて受賞作を決めていく選考委員たちの姿が、ありありと目の前に浮かんで来た。

最も興味深かった話は、「期待する作品」である。どのような作品を応募すれば選考委員の目に留めることができるのか。京極氏はミステリーとしてのセオリーはもとより、重要なのは、「型」にはまらないところを出せるかどうか、と述べ、京極氏の発言を受けて綾辻氏も自分らしさを出すべきだと語っていた。辻村氏と貫井氏も同意見であった。四氏の座談には、今後のミステリーに対する期待と進むべき方向性が示されている。なお贈呈式はYoutubeにて配信中である。

(立教大学大学院生)

編集後記

二〇二一年度も乱歩邸の来館に制限がかかる日々でしたが、デジタル設備などを充実させ、非接触の公開を進めてきました。またセンターとしては、学内外の力を借りつつ、データベース構築やアプリの開発、乱歩邸の3D化の他、建築や映像など、テクノロジーを駆使した乱歩研究を着々と進めてきました。その成果は、HPにて公開予定です。研究者のみならず、一般の方々にもお楽しみいただけますように。(N)

立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター
センター通信 第十六号

二〇二二年三月十五日 発行

編集・発行 立教大学江戸川乱歩記念
大衆文化研究センター

〒一七一八五〇一

東京都豊島区西池袋三―三四―一

電話番号 〇三―三九八五―四六四一

(FAX 兼)

rampo@rikkyo.ac.jp

一般公開日については、センターHP
をご覧ください。